

## 早生及び中生ウンシュウミカンの浮皮軽減技術

ウンシュウミカンの浮皮は温度が高いと発生しやすく、果皮と果肉が大きく分離し、食味の低下や腐敗が増加します。ジベレリン(GA)とプロヒドロジャスモン(PDJ)の混合液の散布はウンシュウミカンの浮皮軽減に有効ですが、顕著な着色遅延を伴い、貯蔵ミカンなどの出荷までに着色遅延を回復できる作型以外では使用が困難でした。そこで、貯蔵せずに出荷する早生・中生ウンシュウミカンにも使える浮皮軽減技術を開発しました。

### ☆ 技術の概要

1. GA と PDJ の混合散布は、通常の収穫期の浮皮度(平均値)は1より小さく(図1)、商品性の高い果実割合(浮皮度が無と軽)は80%以上になります。
2. 早生及び中生ウンシュウミカンの浮皮を軽減するためには、9月上旬にGA(1ppm)とPDJ(25ppm)を混合散布、または8月中下旬にGA(3.3ppm)とPDJ(25ppm)を混合散布します。これらの混合散布は、着色遅延の程度を1週間以内に抑えて浮皮を軽減できます(図1)。
3. 表年で着果量が多く、収穫作業が間に合わないと予想される時などには、9月上旬にGA(1ppm)とPDJ(50ppm)を混合散布、またはGA(3.3ppm)とPDJ(25ppm)を混合散布します。それにより1~2週間着色が遅延しますが、散布果実が十分に着色するまで(通常の収穫期の1~2週間後まで)樹上においても、浮皮度は通常収穫期の無散布果実以下に軽減できます。

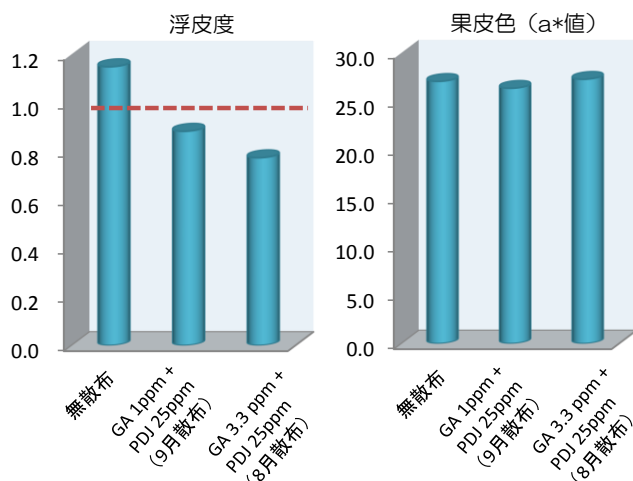


図1 中生ウンシュウミカンの浮皮軽減

- 注1) 「向山温州」にGA 1ppm + PDJ 25ppm (9月1日) またはGA 3.3ppm + PDJ 25ppm (8月15日)で散布。収穫は12月5日。
- 注2) 浮皮度の平均値は、浮皮度は触感で判定し、「無」は浮皮発生無し、「軽」は果梗部等での部分的な浮皮、「中」は果実表面の半分程度の浮皮、「甚」は果実全体にわたる浮皮を示す。浮皮度の平均値は、無を1、軽を1、中を2、甚を3として算出。浮皮度の平均値が1以上で生産上問題となる(図中の赤色波線)。a\*値が高いほど着色良好。
- 注3) 和歌山県果樹試験場の試験結果。

### ☆ 活用面での留意点

1. 薬剤散布の果実の糖度に対する影響は認められません。技術を導入するときには、一部の樹を選んで試験的に行い、浮皮軽減効果や着色遅延程度を確認する必要があります。
2. 薬剤コストを低減したい場合には、低いGA濃度(1ppm)の条件で、安定的な浮皮軽減効果を発現させたい場合には、高いGA濃度(3.3ppm)の条件で使用します。
3. 本技術のマニュアルはホームページからダウンロードして使用することができます([http://www.naro.affrc.go.jp/publicity\\_report/publication/files/keigen.pdf](http://www.naro.affrc.go.jp/publicity_report/publication/files/keigen.pdf))。
4. 詳細については、農研機構果樹研究所(電話:054-369-7110)にお問い合わせください。  
(果樹研究所 カンキツ研究興津拠点 主任研究員 佐藤景子)